

令和元年度 第2回 高浜市誌編さん委員会		
日 時	令和2年3月27日（金）午前10時00分～11時30分	
場 所	高浜市いきいき広場 会議室B	
出席者	委員	神谷純一 曲田浩和 萩原敏和 村松輝一 後藤恵理 宮田克弥 尾崎ヒロミ 神谷坂敏 ※石川伸委員、中川健二委員欠席
	事務局	こども未来部 部長 木村忠好 文化スポーツグループ リーダー 鈴木明美 同 主任 日吉康浩
次 第	1 あいさつ 2 議題 (1) 部会活動の進捗状況について (2) 「たかはま 歴史・まちづくりシンポジウム」報告 (3) 市誌刊行後の取り組みについて 3 その他 市誌編さん委員会委員の任期について	
資 料	資料1 各部会の主な活動状況、執筆内容(案) 資料2 シンポジウムアンケート集計表 資料3 高浜市誌編さん事業の成果・課題を“つなぐ”(案)	

令和元年度高浜市誌編さん委員会【第2回】

令和2年3月27日（月）

1. あいさつ

【神谷純委員長】2月8日のシンポジウムは盛大に行うことができ、ご協力いただいたことに感謝申し上げます。市誌の刊行については、曲田先生を中心に着々と進めてくださっている。本日は主に、刊行後にどのようなかたちで活用していくのかということをご意見を伺うことができるとありがたい。

2. 議題

(1) 部会活動の進捗状況について

<事務局 資料1に基づき説明>

【曲田副委員長】説明にあるように、原稿の出ているものは精査し、出ていないものについてはあらかじめGW明けには集めるようにと考えている。内容について、編さん委員会のみなさんの中で色々書いてほしいことがあると思うが、ページ数には限りがある。そこでどのように内容を精査していくかだが、高浜市にずっとお住まいの方たちにとっては、当たり前だととられる内容があるかもしれない。ただ今の小学生・中学生は全く分からないはずであり、例えば瓦製造の最盛期には、田戸の地域だけで八百屋さんが6軒もあったなど想像もつかない。それをどのようにして読み手にイメージさせるのか、今後こういった歴史をどう活用していくのが重要となる。

例えば現在編さんしている豊田市史は相当なボリュームがあり、江戸時代だけの通史が本年度刊行となっている。しかもその部分のみで700～800ページもある。それに比べてしまうと、高浜市の場合は調査や執筆の期間が非常に限られている。しかしその中でも、郷土資料館収蔵資料の整理や、市内における資料調査を進め、数多くの資料を集めてきた。執筆をするにあたり、他市に比べれば分量は少ないがそれが逆に難しく、何を入れて何を削るのかその精査が重要となってくるだろう。理想は、どの世代でも理解ができるもの。また、市の歴史をよくわかっている人は小学生・中学生にお話ししてもらおうきっかけになるようなものというイメージで進めている。

現在集まっている原稿を読んでみて、先史・古代・中世の部分は高浜市だけのことを切り取っても資料が多くないため、もう少し広いエリアに関する記述を取り入れつつ執筆されている。その後の時代は、資料が徐々が増えてくる近世や近代の様相を記述しながら、今回最もボリュームが多くなる現代へとつなげていく。さらに現代に関しては、「聞き書き」を取り入れながらまとめていく。子どもの頃からここにお住まいの方もそうでない方も、さらには外国で生まれ育った方も、高浜市のあゆみがイメージしやすいものをつくっていきたい。市のキャッチフレーズにある「大家族たかはま」という将来を考えるための要素が徐々に揃ってきており、それを形にする最終段階に入っている。GW明けに大部分の原稿を整え、夏の間で最終調整を行うといった予定で進めている。

【委員】子どもたちに昔の状況や、風景などを伝えるのに、この冊子のボリュームで伝えられるのか。ページ数が少ないのではと感じる。

【曲田副委員長】今回の市誌発刊後、掲載しきれなかったことやより深く掘り下げるべき内容については、『高浜市のあゆみ資料』という形で別冊として発行していくことも考えている。データはたくさん集

まっているが、今回は細かい数値などを十分に入れられない可能性があるため、そういった資料はまた別の形で出していければと考えている。それは、今回の市誌刊行後の取り組みにも関わってくる。

(2)「たかはま 歴史・まちづくりシンポジウム」報告

<事務局 資料2に基づき報告>

【曲田副委員長】 アンケート上は市外の参加者が多いという形になっているが、決して高浜市民の参加が少なかったわけではないと思う。別のところでもあるのだが、こういったアンケートを取ると、地元の方は比較的回答が少ない傾向がある。なので、実際はもっと来てくださっていたはずである。

昨年度も今年度も、外部の方から見た高浜の魅力という視点で開催してきた。今回は常滑を比較対象にすることで、市民の方にも地元について俯瞰的に見てもらうよう意識した。参加者に理解してもらいたかったのは、常滑だけでは土管の国内需要をカバーしきれなかったため、高浜と結託していったということである。その後、高浜は高浜なりの発展をしたということも重要である。アンケートのコメントを見ると、それがうまく伝わっていたようなのでよかったと思っている。今回の内容は市誌にぜひ生かしていきたいと考えているし、こういった機会が隣接市のことを考えるきっかけ・行政同士の懸け橋となればとも考えている。

(3) 市誌刊行後の取り組みについて

<事務局 資料3に基づき説明>

【委員】 観光に関して、自分も伝え聞いている話はあるが、どちらかということではウチ向きという印象である。現在の市民は昔から住んでいた方に加え、新しく入ってきた方も多くいる。そのような中で今後どのようなことに取り組んでいくべきかは、一度検討してもいいのではと考えている。子どもたちが今回の市誌を読んだ時に、例えばお祭りであれば、なぜこのお祭りがずっと続いているのか知ることができる。市内でも吉浜は、比較的小子どもが地域行事にたくさん参加して引っ張ってくれている。こういった場合は学校などで過去の歴史や経緯を伝え聞いていると思うが、毎年ごく一部の市民しか関わっていないような行事だと、なかなか難しい部分もある。こういった部分も広く知ってもらうためには子どもの読者も意識して、かみ砕いて記述した方が良いと思われる。

【神谷純委員長】 例えば観光協会の中で、新しい市誌の観光に関する部分をコピーして皆さんに配り、現在の観光に「足りない」「抜けている」視点について意見を出し合うというのも有効だと思う。それをきっかけにどうやっていけば高浜市の観光が盛んになるのかを検討するきっかけになると良い。

【委員】 実際にできるかどうかは今後の課題だが、文書のみ残っているようなことをできるだけ映像化したりして、子どもたちが見ても分かりやすいように整えることができれば良いと考えている。映像であれば、他市町村にお住まいの方がそれを見て興味を持ち、高浜市を訪れるようなケースが増えるのではないだろうかと考えている。

【神谷純委員長】 現在の高浜だけではなく、過去の高浜もこのようなすばらしい点があったなどわかるようなものをつくれると、より効果があるのではないだろうか。

【委員】 自分自身も、新しい市誌を読んだ時にこれまで全く知らなかったことが載っているということがたくさんあると思う。同じように、子どもたちが市誌を初めて読んで、そこに載っていることに興味を持った時、自分の住んでいるまちに対する愛着が湧いてくるのではないかと感じている。

【神谷純委員長】小学生の子どもたちが地元について学ぶのが3・4年生で、その時に教科書代わりに使うのが『のびゆく高浜』である。そういった学習の中で今回の市誌も同時に使ってもらえると、商業についての詳しい情報を得ることができたり、聞き書きで話を聞いた話者に実際に話を聞きに行くなど、学習の幅が広がっていくはずである。のびゆく高浜を扱わない他の学年だと、カリキュラムに余裕がないため、例えば5・6年生にそういったことをやって欲しいと依頼しても難しいかもしれない。なので、地元を授業で学習する3・4年生をターゲットにしていくと良いかもしれない。

【委員】例えば、今はスーパーに行ってレジで支払いを行うのが普通だが、昔の魚屋や八百屋はカゴが置いてあり、そこにお金を入れてつり銭もそこからもらう、そのような時代があって、今があるといった変遷を伝えることが重要だと思う。

【委員】今年度のシンポジウムでテーマとなっていた土管について言うと、うちの曾祖父が日本陶管を立ち上げる際に、常滑から高浜に技術を持ってきたのだが、当時どのような状況で常滑から来たかどうかは分からない。そういった資料は火災により紛失してしまっているため、母や祖母などから口伝えで聞くしかそれを知る方法がない。そういった場合は、シンポジウムのように関係性を持つ人たちが集まって話し合う場がないと、伝えていくのは難しいのではないだろうか。

また、私の家の井戸は土管でできているが、そういう物も現在だと安全性の基準に合わず、どうしても壊す方向に話が進んでしまう。教材として残せるものは残したいが、やはり安全性も優先しないといけないため、現存する間に写真や映像等で記録するなど、残し方を考えていくべきだと思う。

【神谷純委員長】南中学校で部活動にもなっている「えんちょこ獅子」は、鬼みちまつりや県の民俗芸能大会の際に披露しているが、市内でも知っている人や関わっている子どもが減ってきてしまっている。例えば、各小学校の全校集会を巡回しながら披露するという機会をつくると、5年で一巡するため、小学校在学中に一度はえんちょこ獅子を見ることができる。そういったことができれば、曲芸ともいえるあのような文化財が高浜にはあるのかと、子どもが見て感じられる。そんな機会がつけられると嬉しいなと思う。

【委員】まちづくりへの活用というのはなかなか難しいこともあると思う。市の歴史や文化を「残す・守る」という方向をまずはしっかりと進めてもらいたい。今回、何十年ぶりに市誌編さんという活動が起きたが、何ページかを毎年つくっていくという形でデータを残していけると良いのではと思う。そうすれば、今回のように何十年もの歴史を遡り調べるといった必要はなくなるのではないだろうか。

それと子どもたちの関係だが、以前はまちづくり協議会の出前授業で、自分の経験を子どもたちに話すという授業があった。しかし残念ながら、カリキュラムの関係で無くなってしまった。その取り組みが良かったのは、子どもたちに話をする中で、「皆さんも地域の一員として発言・行動をしていいんだよ」という事を直接伝えられたこと。その子たちが中学生になり、地域の行事などへ積極的に参加してくれるようになったことも出前授業の効果として挙げられると思う。こういったことから、子どもたちと地域の結びつきがもっと身近になっていくと良いと思う。また公民館を例に見てみると、翼や南部がなくなり、地域組織が変わってきている。さらに地域活動も形を変えつつある。そういったことをどういった切り口で残していくのかは難しいことだが、今後大切になるのではないかと。

【委員】資料を整理したり集められた方、調査執筆をされている方の努力が、今回市誌という形として残る。しかしそこで終わりでは意味がなく、今後いかに活用していくかが課題になると感じた。「調べる・知る」という点において、図書館のレファレンス対応や市誌を読む会の開催が挙げられているが、こういっ

た取り組みは、広くいろいろな方に市誌の内容を知ってもらいたい機会になるのではないかと感じた。また、内容によっては、読んだだけで子どもの頃の思い出が浮かび上がってくる方もいると思うので、この市誌は昔を思い出して語り合う時の素材としても役立つのではないかと感じた。

【委員】先日、安城の箕輪町が町内会を中心に町史をつくるというテレビ番組が放送されていた。その番組内で町内会や地元の人々が、自分たちの住む町を愛しているから歴史を残すということで動いていた。一方で高浜は、なぜ市誌をつくっているのに市民が盛り上がりきらないのかを考えると、市民が自分の住むまちのことを知る環境が整っていない状況だからだと思う。例えば、整理した資料をデータ化して、図書館で検索すれば見られるなど、郷土資料の開けた利用方法を考える必要がある。また、以前この会議で話を出した、木材コンビナートなどを含めた沿岸部の変遷の話は、本編のどこで扱われるのか。あるいはその部分は別冊で出るのか。

【事務局】沿岸部の変遷に関してはもちろん大切なテーマである。ただ、具体的に本文中のどの箇所を取り上げるかは、もう少し全体の原稿が上がってきてから整える必要があると感じている。全体のボリュームが限られている中で、今回は何を伝えなければならないかということを定期的に打ち合わせているので、今の段階ではまだ内容の変動が大きい。以前この委員会でも話が出ていたが、この市誌はインデックスとして使うという性格も持っており、これをもとにさらなる学びに繋げたり、ここで掲載しきれないものは、別冊資料として発行していくことも考えている。そういったことを踏まえながら、今は内容を精査している最中である。

【委員】昭和38年頃に漁業権を買い上げ、養鰻等をやめて埋め立て地をつくり、工業団地となっている歴史がある。これを抜かしてはいけないと思う。ページ数に限りがあるのは分かるが、高浜市にとって重要な変化の内容は掲載すべき。この編さん委員会で、もっと掲載内容についての意見を出し合うことも必要だと感じる。

【委員】現代編の第1章第2節に「産業界の動向」という項目があるので、そういったところで取り扱うべきだろう。確かに高浜市にとって重要な内容である。

【委員】子どもたちの遊びに関してはどこに入ってくるのか。

【事務局】遊びに関しては、第6編に「高浜の暮らし」という章があるため、そこで記述することになっている。

【曲田副委員長】令和3年度以降の取り組み内容を検討するにあたり、先月の部会長会議でまず原案のようなものが示された。それをもとに各部会長から、今回の市誌をどうやって市民とつなげていくかという視点でさまざまな案をいただいた。市誌を読む会というのが事業案の中に出てくるが、これは執筆した先生方が、何をもとに文章を書き、何を市民の皆さんにわかって欲しいのかを伝える取り組みである。執筆者の中でも、特に各部会長は執筆して終わりではなく、市誌と市民との橋渡し役を担ってほしいと考えているし、了解もいただいている。

これからは「継続する」ということが大切だと考えている。前回の市誌はその意識が足りなかったことが問題として挙げられる。それはなぜかという、「歴史はあくまで歴史」と考えられていて、まちづくりに活かすとか、商工関係や観光関係に活かすといった意識が薄く、まちの中で話し合いができていなかったからではないかと考えている。しかし今回は、このように様々な立場の方々からご意見を伺い、ご協力をいただいている。来年度いよいよ刊行となるが、そこで終わりではなく、今後市誌を活かしていくためにはどうすべきか、足りない部分をどう補うかを考えるため、もしかしたら体制は変わるかもしれ

ないが、「市誌編さん委員会」は継続すべきだと考えている。そして編さん委員会を中心にしながら、美術館・図書館などの各所と連携をして事業を展開するような方向に持っていきたい。

また、委員会と共に『高浜市のあゆみ資料』の刊行も継続し、本編に足りなかった部分を補っていく。高浜市のモノ・コトをすべて詳細に残すということはなかなか難しい。後世に伝えるべきものは何か、まちにとって核となるものは何かをよく考えたうえで、様々な形で展開ができれば良い。

市に対しては来年度以降、どういったところに予算をつけてくれるのかということがある。もちろんできる部分・できない部分あると思うが、それは現在関わっている委員のみなさんも同じである。市は市の役割、編さん委員会や編集委員会は各々の役割を果たしていきながら、まだ考える時間が1年あるため、さまざまな可能性の議論をしていければ良いと思う。先ほどの「木材コンビナート」に関するご意見は、衣浦湾全体を考える際に重要なことであるため、しっかりと受け止めたい。

【委員】 本編に掲載しきれなかった内容の別冊はどうするのか。やるのかやらないのか。

【事務局】 別冊については「のこす・まもる」という観点から、令和3年度以降も続けていくべきだと考えている。現在執筆いただいている先生方も、見開き1ページでは伝えきれないことが多くあると常々言っておられ、書ききれない分は別冊資料に回そうと、割り切って書いてくださっている方もいらっしゃるの、発行は継続したいと考えている。

【委員】 前回の市誌刊行後も、別冊がいくつか出ている。参考だが、知立市の市政40周年記念の企画展で「写真でめぐる知立」が行われ、図録には古い写真が多く掲載されている。高浜市でもぜひ、同じようなものをつくってほしい。

【事務局】 他の市町村史でも、古写真をメインに編集した「写真で見る〇〇」といった資料集を発行するところがある。ここ数年、郷土資料館で眠っていた古写真のデータ化を進めているため、そういった資料集をつくることは可能かと思う。

【委員】 私も、郷土資料館や美術館などで多くの古写真を見てきているので、それらを使いながらこういった資料集をつくりたいという思いがある。

【曲田副委員長】 他市だと、市のホームページにそのような古写真を掲載しているところもある。

【事務局】 古写真は市広報の裏表紙「たかはまアーカイブ」に掲載することがあるが、市民の方から問い合わせが入るなど反応が良い。今後、どのような形で市民の皆さんへ公開するのが良いか検討していく。

3. その他

【事務局】 市誌編さん委員会の任期が今年度末で一旦区切りとなるが、来年度が市誌の刊行年であるため、この事業が始まった当初からご指導いただいていた現委員のみなさまに引き続きご協力をお願いしたいと考えている。ただ、令和3年度以降、市誌編さん委員会の役割や体制の刷新もありうるため、次回の任期は令和2年度末までの1年ということでお願いしたい。

→ 編さん委員一同、了承。